根拠に基づく医療 (EBM) をサポートするための実験技術の開発と評価系の確立

田頭秀章,^{*,a} 小堀宅郎^bDevelopment of Experimental Techniques and Evaluation to Support
Evidence-Based Medicine (EBM)Hideaki Tagashira^{*,a} and Takuro Kobori^b

^aDepartment of Pharmacology, Graduate School of Pharmaceutical Sciences, Tohoku University;
6-3 Aramaki-Aoba, Aoba-ku, Sendai 980-8578, Japan; and ^bDepartment of Clinical
Pharmacy, School of Pharmaceutical Sciences, Kobe Gakuin University;
1-1-3 Minatojima, Chuo-ku, Kobe 650-8586, Japan.

わが国は、急激な高齢化が進行し、医療の面でも重大な社会問題に直面しています。医療の質を高めるために、薬学の果たす役割は多大であり、患者に対する QOL の改善と治療法の選択に貢献する根拠に基づく医療 (evidence-based medicine; EBM) の確立が不可欠と考えられます。本シンポジウムでは、田頭秀章 (東北大学) と小堀宅郎 (神戸学院大学) がオーガナイザーを務めて、比留間 航 (福岡大学)、Panot Tangsucharit (岡山大学)、西中 崇 (神戸学院大学)、矢吹 悌 (東北大学)、河原 遼 (熊本大学) の、薬物療法に係わる実験技術の開発を精力的に行っている 5 名の大学院生により、解析手法において既存の薬効解析にとらわれずに、動物個体、組織、細胞レベルで新しい評価系の確立に取り組んでいる研究について紹介しました。また、EBM をサポートする確実な研究成果を得るための多面的な実験技術改良の現状と課題について紹介しました。今回取り上げた疾患の治療薬や開発中の化合物は、治療満足度が得られていない薬や疾患領域

であり、薬効を評価する実験系を確立することが重要です。各シンポジストはユニークな薬効評価法を用いて様々な角度から薬物による生体反応、薬理作用をとらえることに着目して研究を進めていたので非常に有意義なものとなりました。さらに、シンポジウムでは積極的な異分野間での意見交換を通じて、若手研究者の人的交流もできたことから、将来の創薬研究の発展に寄与し得るシンポジウムとなりました。本シンポジウム及び本誌上シンポジウムが、若手研究者による薬学会の活性化や新しいメカニズムを有する新薬の創薬に貢献することを期待します。

最後に、本誌上シンポジウムの開催及び執筆にあたり貴重な機会を与えて頂きました日本薬学会第 132 年会組織委員長 松田 彰 教授、並びにご指導頂きました日本薬学会役員の皆様、そして今回ご参加頂きました各大学の先生方並びにご尽力頂きました関係者各位に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

^a東北大学大学院薬学研究科薬理学分野 (〒980-8578 仙台市青葉区荒巻字青葉 6-3)、^b神戸学院大学薬学部臨床薬学研究室 (〒650-8586 神戸市中央区港島 1-1-3)
*e-mail: blyd1021@s.tohoku.ac.jp